

# 被災地の本当の話をしよう ～東日本大震災を経験して～



株式会社オフィス TOBA  
(前 陸前高田市市長)

戸羽 太氏

## プロフィール

1965年生まれ、神奈川県足柄上郡松田町出身  
平成7年4月～平成19年2月： 陸前高田市議会議員  
平成19年2月～平成22年12月： 陸前高田副市長  
平成23年2月～令和5年2月： 陸前高田市市長  
(平成23年3月11日： 東日本大震災発生)

## 1 はじめに

私は陸前高田市市長を退いてから、主に講演活動をしています。全国で自然災害が頻発し、今後も災害が起こることが予測されている中で、我々が経験した東日本大震災をどのように教訓として活かせるのか、あるいは我々の反省や失敗を皆様にお伝えすることで私達と同じような目に遭う人を少しでも減らしたい、そのような思いで活動をしています。

私は神奈川県生まれで、育ったのは東京都町田市です。社会人になっても町田に住んでいました。私の父は岩手県陸前高田市の出身で、県議会議員と言えば格好が良いのですが、非常に選挙が弱かったこともあって、私自身は政治に何の興味もなく、東京でサラリーマンをやっていたらバブルが弾けました。父からは「いつまで電車に乗っているんだ。岩手では車で通勤できるし、渋滞も信号も無いぞ」と言われました。確かにそうだなと思い、頭を切り替えるには良い場所だと考えて、28歳のときに岩手に引っ越しました。

1995年の統一地方選挙で、私の父は現職で絶対負けなと言われていたのに負けました。私は当初やる気も何もなかったのですが、無理やり告示の3日前に説得されて、陸前高田市議選に出ささせていただき当選しました。市議をやってみると地方ならではの課題がたくさんあり、非常にやりがいがありましたので、政治の世界に入れていただいて良かったと思います。

その後、陸前高田市の副市長を経て、2011年に当時の中里市長が体調を崩されて、私が市長選に出馬、当選をさせていただきました。よし頑張るぞということで、私が市長に就任したのが2011年の2月13日です。翌14日に初登庁、そして1か月も経たない3月11日に東日本大震災が起こりました。

中里市長は体調が悪かったので、震災前に私に交代していた事は彼にとっても地域にとっても良かったのかなと自分に言い聞かせながら復旧復興にあたりました。

本日の講演タイトルは「被災地の本当の話をしよう」です。私は口が悪いと言われることもあるのですが、震災の経験については伝えなければいけない真実が沢山あります。

## 2 陸前高田市について

陸前高田市について、簡単な写真をお見せしたいと思います。これは震災前と震災後の陸前高田市です。この写真に写っているのが陸前高田市の中心市街地と呼ばれるところです(図1)。

震災前の市街地



震災後の市街地



図1 陸前高田市の中心市街地(震災前後)

手前に流れているのが気仙川という二級河川です。河口の三角州が高田平野となり、そこが便利なので人々が集まりました。

三陸はリアス式海岸が有名で、隣の大船渡市など海の背後地がすぐ切り立った崖というところが多いです。震災前には、陸前高田には平らな土地があっただけでなく羨ましがられました。海拔0～5メートルぐらいの土地に市役所も体育館も図書館も商店街も集まっていました。

震災前の写真、海岸線に沿って緑の松林が見えます。これが高田松原で、7万本の松の木があったと言われていましたが、津波でなぎ倒され、地盤沈下により海水浴場や砂浜も無くなりました。

津波は、内陸まで8キロメートル遡上して、山手に住んでいる方々の家まで流された大変ショッキングな出来事でした。ほぼ0メートル地帯の中心市街地に主要な公共施設は全部集まっていたので、市役所も消防署もなくなり、唯一残ったのは高台にあった給食センターでした。小中学生あわせて当時でも1,200人ぐらいの小さな町ですからセンターも非常に小さいわけですが、そこに行方不明の方や、別の場所に避難された方々の情報を集めて壁に貼り出していました(図2)。



## 犠牲者数・行方不明者数

図2 給食センターに貼り出した安否情報を確認する人々

家族や大事な人を探している人が、24時間ひっきりなしに来られていました。陸前高田市の人口は、平成22年の国勢調査で2万3300人。市というにはあまりにも人口が少ないのですが、この震災によってご遺体で発見された方が1,557名、また、今日現在でも202名の方の行方がわかりません。そして震災関連死として、持病の悪化やアルコール依存症、あるいは自ら命を落とされた方も含め1,800名、人口の8%に近い方が犠牲になりました。

このような割合となると、山手に住んでいる方も含めて全ての市民が、家族や友人等、誰かしら大切な人を亡くされた状況で、直接的な被害が少なかった方であっても精神的なダメージを受けられています。

### 3 なぜ被害が拡大してしまったのか

なぜここまで被害が拡大してしまったのか。岩手県の中で、陸前高田市は大槌町と並んで本当に酷い状況でした。人がたくさん住んでいるところに直接津波が入ってきたことで被害が拡大したことは確実ですが、もう一つは国や専門家が発出する予測情報の過信がありました。

例えば南海トラフ地震は、今後30年間に70%～80%の確率で来ると言われており、国や県がシミュレーション結果まで出して、どこの町のどの辺りまで、どれぐらいの水が入ってきて、どれぐらいの人が亡くなるという数字が出てくる時代です。

なぜ、ここまで被害が拡大してしまったのか？

#### 国や専門家が発出する予測情報

- 南海トラフ地震
- 首都直下型地震
- 宮城県沖地震
- 日本海溝・千島海溝地震

図3 国や専門家が発出する予測情報

図3の下から2つ目に宮城県沖地震があります。その確率は南海トラフよりも高く、三陸沿岸には間違いなく津波が来ると言われていたので住民の皆さんも自覚していました。

自助・共助・公助という話がありますが、自主防災組織を組織していただいて、行政には限界があるということを最初から言っていました。

どの地域、どの場所にどんな人が住んでいるのかは、行政がデータを出さなくても田舎ですから分かります。あそこには寝たきりのおじいちゃんがいる、あそこには赤ちゃんがいる、あそこには車椅子の方がいるといったように、地域の方が分かっています。一番分かっている方々で色々相談をしてくださいというふうに、共助を促していました。地域の方にも本当に一生懸命やっていただいて、例えば気仙川のコンクリート護岸を1か所壊して、中がどうなっているのか見せてくれというお願いがあり、一部を壊させていただいたこともあります。劣化や空洞化しているようなところもあり、だから行政側もしっかりやってくれよという話もございました。それくらい皆が真剣にやっていました。

震災後に「津波でんでんこ」という言葉が有名になりました。正しいかもしれませんが、とても行政が言える言葉ではありません。隣のおじいちゃんは足が悪いから放っておいて逃げなさいという話にはならないのです。

地域の皆さんから、おじいちゃんおばあちゃんをおんぶして山まで上がれないからリヤカーみたいなものを用意したいという話もあり、そういう制度を作りましょうということで、地域の皆さんが防災減災の勉強会をするために何か道具を買う、そういうことに対して行政が補助金を出すようなこともやりました。私は正直、岩手県でも全国でも、ここまで地域の皆さんが真剣にやってくださったところは他に無いだろうと自負をしていたわけです。

ところが、そこまでやっていたにも関わらず大きな被害を出してしまった。一言で言ってしまうと、出された予測情報を完全に鵜呑みにしてしまった。皆さん興味があるがゆえに、国や専門家の皆さんがどのような情報を出しているのかを細かく知っていたのです。例えば、海から1.2キロメートルほど内陸に入った市役所の目の前の道路に、50センチから1メートルの海水が入ってきますというのがシミュレーション結果でした。当時、県がシミュレーション結果を出したから、自治体はそれをハザードマップに落としつけて色付けして、各世帯に配りました。

各世帯の皆さんは、まず自分の家に津波が来るのかどうか、来るとすればどれぐらいの水が来るのだということを知りたいがわけですけれども、市役所のところには50センチから1メートルしか水が来ないという情報を皆が知った瞬間に、これまでは、「地震が来ました、津波警報が出ましたとなれば、足の悪い方であっても高齢者でも頑張って高台まで逃げる。」というルールだったわけですが、それが、「おじいちゃん、おばあちゃんが2キロも3キロも遠くまで行って、そこから山や丘

へ上がるなどそもそも無理だ。それならば街の真ん中に3階建ての市民会館がある。1メートルか2メートルの水ならば2階の観客席に逃げた方が迅速に逃げられる。そして、いくら水は強いと言っても、鉄筋コンクリートの建物が倒壊することはまずないだろうから、その方が良い。」という市民の意見が変わっていきました。それが平成17年か18年頃です。

行政と市民が話し合いを重ねて、皆さんがそう言うのであれば、そういうことにしましょうと、シミュレーションはこうですからということで、以来は毎年毎年、市全体でやっている津波避難訓練では、その建物に逃げ込むという方針が変わったわけです。

皆さん熱心ですから、その地域の区長さんや自主防災組織の会長さんは張り切って先頭に立って皆さんを誘導してください。それを繰り返しているうちに、いよいよ23年の3月を迎えるわけです。もう立ってもいられないような大きな地震が来ました。国の専門家の皆さんが言っていた通りやっぱり来たねと、いつもの訓練の通りに逃げましょうと言って、迅速に動いてくださった方が大変多かったです。

先ほど言った市民会館は、陸前高田市役所と道路を挟んで目の前にある建物なので、我々もそこにたくさんの方々が、順調に逃げてくださったことを確認しました。みんな落ち着いて、そしてリーダーの人たちがちゃんとおじいちゃんおばあちゃんのお面倒を見ながら、たくさんの方々がその建物に吸い込まれるように入って行きました。

しかし、いざ津波が来たら、我々が思っていた津波とは全く違っていました。これは、少し水が引いている状態ですが、陸前高田市役所の写真です（図4）。市役所は3階建て（一部4階建て）で、この写真では3階の途中まで水が入っている状況です。ここが中心市街地ですから、大きな建物以外はもちろん倒壊していますし、先ほど申し上げた市民会館が海側、この写真で言えば上側にあるのですが、完全に水没をして見えない状況です。200人か300人か、一体何人の人が逃げたのか定かではありませんが、この中に逃げ込んだ人たちが無事だということは直感的にあり得ないと思いました。



図4 津波に襲われた中心市街地

写真の市役所の上に人が何人か乗っていますが、このうちの1人が私です。引っ張り上げてもらってギリギリ助かったわけですが、津波が一番高くまで来たときは屋根ギリギリでした。

震災の経験の中で様々な教訓、反省というものがあるわけですが、私達が想像できる範囲なんていうものを自然は完全に超えてくるということ、まざまざと感じざるを得ませんでした。

実際にたくさんの方が流されていくところも見ましたし、津波というのは1回引いてからまた戻ってくるわけですが、壊れていない屋根の上にお母さんとお子さんが乗っていて、この市役所の前を海の方に流されていく。お母さんは助けて助けてと叫んでいますけれども、隣で子供は何かアトラクションのようにはしゃいでいたりしていました。

人なんて、そんなときに何もしてあげられないのです。映画であれば誰かが飛び込むとか、ロープがあるとか、そんな話なのかもしれませんが、ただただ流されていく人たちを見ているしかないという状況でした。

このような震災が起こって、我々の生活は一変しました。

## 4 避難所、トイレ、仮設住宅の問題

写真（図5）は、市内で一番大きな避難所、高田第1中学校の体育館です。最大で2,500人が押し寄せたと言われていますが、この体育館は古いため、リニューアル工事をしており、3月11日の午前中に落成式がありました。私も市長として午前中にご挨拶に行き、生徒の皆さんに卒業式に間に合っただけでよかったね、新しい体育館で卒業を迎えることができ本当に良かったね、なんて話をしましたが、その後に避難所になるなどとは誰も思っていませんでした。この避難所の中にも、たくさんの人権問題がありました。

震災後にはパーティションを置くようにしたり、あるいはダンボールベッドができたり、快適とは言えないでしょうけれど、少しでもプライバシーが守られるようにとか、あるいは腰の悪い人が少しでも楽に横になることができるようにとか工夫されていきましたが、当時はまだまだこんな状態でした（図5）。



図5 避難所設置と人権問題

あまり話題にならないのですが、避難所で一番大変なのはトイレの問題です。その昔は田舎に行けば、地面に穴を掘って周りを囲っただけの外便所みたいなものがあったりしたと思

います。

学校給食センターもトイレが使えないということで、建設機械のショベルで穴を掘って板を渡して、和室のふすまを重ねて小屋を作ってもらって、用を足したら石灰を撒くというような、原始時代みたいなトイレを使っていました。もう恥ずかしいとか汚いとか、不衛生とか若い女の子は嫌がるとか、そういう事を言っている状況ではありませんでした。

生理現象は我慢できませんので、地面に穴を掘った簡易トイレであっても無いよりは有った方がいい。しかし、ぜひ皆さんに考えていただきたいのは、これは陸前高田だから地面に穴を掘ることができたわけですが、東京の都心には穴を掘るところはないです。そして、タワーマンションには陸前高田の町内会よりも多くの方が住んでいるわけです。電気が停まってしまえば公共下水道も何もあった話ではありません。生理現象は待たなしです。しかし、こういった仮設トイレみたいなものができても、高齢者や障害者の方は全然使えない、そしてこの和式スタイルでトイレをすることも今の子供たちにはできません。そういうことを考えると、このトイレの問題は実はすごくシビアな問題なのです。

先日、神奈川県で内閣府主催の防災国体があって、私もシンポジウムに参加させていただいたのですが、日本トイレ研究所の加藤先生はまさにこういう問題を考えておられて、例えば凝固剤が入ったビニール袋を必ず用意しておいてくださいとか、いろんなことを今活動されているようですが、先生は「トイレの問題は誰にも相手にされない、そんなの大したことないって言われる。」とおっしゃっていました。

先ほどの体育館もそうですが、学校の体育館で小学生が、あるいは中学生が普段活動をする時に使うトイレとしては、個室も含めていくつか用意されているし、学校の中にも何か所かありますから数は足りていますが、そこに1000人も2000人も来たら瞬間で終わりです。

陸前高田の場合は、家を流されてしまった人たちは当然避難所に来られるわけですが、高台に住んでおられる方々は、家はそのまま残っているので、ご自宅で生活ができます。

でも下水道そのものは動いていないので、自宅のトイレも3、4日すれば使えなくなる。そうすると、市役所にいっぱい苦情が来るわけです。そのとき何をやったかという、2軒の家に1個ずつ仮設トイレを置いたのです。よく工事現場やイベント会場にある電話ボックスみたいなトイレです。ところがそれもすぐに一杯になる。しかし、その処理業者や清掃業者の皆さんも思うように動けない。

この問題では喧嘩も起こりますし、行政と市民のいざこざも起こり、大変な思いをしました。

トイレは、いざという時のために備えておかなければならない課題であると考えています。

次に仮設住宅です。陸前高田は、岩手県内で一番早く手をつけていただきました。ただ、この仮設住宅も一度に完成して皆

さん一斉にどうぞというわけではなく、一番初めにできたのは数戸でした。そうすると、そこに誰が入るのかという話題でもちきりになります。行政内部で決定はできませんから、テレビ局まで呼んで公開抽選会をやりました。

ところが、一番目に当たった人が私の友達だったため、「ほら見る出来レースだ。」と言われ、本当に大変でした。

そして、プレハブ資材が不足してくると、途中からもっと立派な住宅資材に変わったりしました。普通の住宅用サッシが入り、ドアも格好良くなって、そうすると先にプレハブに入っていた人たちから文句が出てきます。何で後に入った人が立派な仮設住宅に入って私たちはプレハブなのだという話になります。



図6 プレハブの仮設住宅

## 5 行政職員の苦勞と、市長としての苦惱

自然災害ですから、ぶつけるところは行政しかない。本当にたくさん問題が起こりました。

仕事が無いので朝から晩までやることも無いわけで、何をするか。まずお酒を飲んで家族に暴力を振るって、家族もたまりかねて警察を呼ぶ。あるいは怪我をして救急車を呼ぶ。それが地域で話題になることもありました。

住宅地ができてくると、震災前に裕福だった方も、震災前に生活が大変だった方も、みんな同じような仮設住宅に入っていて貧富の差はそこにはなく、みんな仲良しでした。でも、誰々が今度家を建てるらしい、仮設住宅を出ていくらしいとなると急に見る目が変わるわけです。昨日までおはよう、こんにちはと言っていたのに無視をし始めたりするのです。そういった話は警察が介入するような話ではないので全部行政に来ます。そのため、行政の人たちの苦勞は尋常ではないものがありました。

震災が起きて、まず我々がやった仕事は死亡届の受付です。震災翌日の3月12日から、外にテントを張って受付業務を始めましたが長蛇の列です。家族が亡くなった、寒い、自分これからどうなるのだろう、色々な不安があるのに、ただただ待たせられるので、皆さん順番が来たときには完全に切羽詰まった状況になります。お前らふざけんなよ、などと言われるのは普通なんですね。たまたま受付をやっていたのは私の知り合い

の若い職員でしたが、彼自身もお父さんとお母さんを亡くしているんです。だから私は彼に、公務員は市民に対して口答えをするとか、大きな声を出すなんてことはあってはいけないけれども、我慢できなくなったら、あなたが潰れるぞと言いました。言われっぱなしではなく、かといって文句を言い返すわけでもなく、自分だって両親を亡くして皆さんと同じ気持ちなんですということを伝えれば、普通の人だったら悪かったという気持ちになるはずだという話をしました。

でもやっぱり言えない人は言えないのです。結果として彼は心を病んで、市役所を辞めていきました。そういう職員が沢山いて、私も力不足を感じるがありました。



図7 災害対策本部を給食センターに設置

冒頭に申し上げたように、市役所が使えない、消防署も流されたということで、学校給食センターの駐車場兼倉庫のようなところに災害対策本部を設置しました。市役所の職員、消防関係者、自衛官、警察の方々なども来ていただきましたが、ここで一つ私自身が困ったことがありました。

災害対策本部ですから本部長は私になり、自衛隊の皆さんに対しても私が指示を出せという話でした。私は、自衛隊が何をできるのかさえ知りませんでした。何を願えば引き受けていただけるのか、人を探してくださいという当たり前のことをお願いして良いのか。自衛隊がどういう装備を持っているか、人命を助けるということが大前提であるのは当たり前なんです。そういうことについても、どのように指示をしたらいいのか、正直わからなかったのです。陸前高田の災害が酷いということで、たまに偉い人が会議に来られます。私はそこに来られたトップの方からレクチャーを受けて、形式上は市長から自衛隊に指示をしてくださいと言われるわけです。クーデターのようなことを考えれば、軍備を持った人たちに全部を任せることはできないという、それはよく分かるのですが、ド素人の市長が1分1秒を争うときに自衛隊に指示を出せと言われても、どれだけの人が的確な指示を出せるのか。ここには非常に疑問を感じました。

消防の人たちも九州とかから来てくださるんです。なぜ陸前高田に来てくださったのですかと聞くと、自分たちもよく分からないけれど、とにかく東北に向かって出勤しなさいと言われてたので、ポンプ車で向かって来て、東京くらいまで着いたとき

に連絡が来て、あなたは岩手県の陸前高田市に行きなさいと言われてましたとのことでした。九州から陸前高田まで来てくださった彼がどれくらい滞在するかというと、24時間も滞在しません。そして九州へ帰っていくんです。さっき着いて名刺を交換して、よろしくお願ひしますと言ったばかりなのに、すぐに帰りますという、なぜこのような仕組みになっていたのか。

いまは同じ災害があっても、もっといい形になるだろうと思えますけど、当時は、九州から来るんだったら、もうちょっと近場の人たちを集めてほしいと思いました。国であれ県であれ、あのかのあれはうまくなかったよねということが浮き彫りになって、改善されていけばいいなと考えています。



図8 行方不明者の搜索、ご遺体の収容・身元確認

次に、行方不明者の搜索と、ご遺体の収容・身元確認です。これは本当につらい作業で、私自身は不明者の搜索には参加をしていないわけですが、搜索をする消防団員も普通の市民であり、彼らは自分の家も流されて、あるいは自分の家族もいなくなっているような状況の中で、一生懸命つらい作業をしてくださいました。

ご遺体をすぐに収容してあげられれば良いのですが、当時はガソリンが無い、電気が無いという中で、搜索に行く人たちは、みんな低いところに行きます。そうすると、本来であれば、防災無線というのがあって、またあの津波警報が出た時には、搜索している方々に上がってくださいと流せば済む話なのですが、電気が通っていませんし、防災無線も壊れていますので、作業をしている人に対して、どうやって危険を知らせるかという話になります。

消防団の各分団各部が持っている小型ポンプ車を高台に持ってきて並べて、一斉にサイレンを鳴らしました。ガソリンは大丈夫かと言いながらやらなければなりません。当時、最初の3日間は1時間に1回ぐらい警報が出る感じでしたので、警報が出れば避難して、警報が解除されればまた作業するという繰り返しでした。腕や足が見えているご遺体でも、残念ながら途中で収容して差し上げることを中断せざるを得ない場面も多々ありました。また、ガソリン不足のために、収容所まで直ぐに運んであげることができないこともありました。

そうは言っても日々、小学校の体育館にご遺体が並んでいくわけですが、体育館は50体ぐらい入ると一杯です。行方不明者を探している方々も、自分の車が流されていたり、車は生きていてもガソリンが無いということで、また田舎ですから小学校まで行くために10キロとか当たり前に離れていますので、そこまで歩いて行って、うちの娘が居なければいいなと思いながら入っていくわけです。もしそこにいるのであれば、早く見つけてあげなければという声もあるのですが、行くすべが無いのです。次の安置所に行きたいけれど、足が無いので行くことができない。したがって身元が分からないご遺体はたまっていく一方で、もちろん傷んでいきます。

警察官の方とかがご遺体を見つけると、血まみれになっている方、部位がない方、身体が変色している方、泥だらけの方、いろんな方がいらっしゃるんですが、できる範囲でしようけれど衣服を脱がせて体を綺麗にしてくださるんですね。ご家族と対面するにあたって、できるだけ綺麗に仕上げたいということだと思います。でも、若い女性であっても隠すものは何もない、もちろん棺桶も何もない。後になるとご遺体を入れる袋がいただけるようになったのですが、当時は本当に何も無い。先進国と言われる日本に生まれて、こんな人生の最期はあるものかと思うといたたまれない気持ちで一杯でした。

震災後、災害対策本部にリエゾンと呼ばれる方々も、国土交通省から派遣されてきました。でも我々はリエゾンという存在を知りませんでした。背中に書いてあるから国土交通省の人なんだなというのは分かるけれど、どうして国土交通省の人が一杯来ているんだろうなとしか思いませんでした。とにかく我々の仕事は、ご遺体の収容と身元確認ですし、探しておられる市民の皆さんをしっかりとフォローすることが当時メインでしたから、リエゾンという方々もいらっしゃるけれどもあまり気かけないでいました。そのときに、当時は衛星電話しか通じなかったのですが、そのリエゾンの方が私のとこにいらっしゃって、東北地方整備局長の徳山さんからお電話が繋がっているの、出てくださいと言われたのです。私はその方に、申し訳ないけれど、今ここを離れて道路の話などをやる気はないです、今そういう状況ではないですからという話をしました。しかし、いやそういうことではないようです、とにかく電話に出ただけならば分かるので申し訳ないけど電話に出てくださいという話で、ワンボックスカーの中で電話に出させていただきました。

私は冒頭、いま個々人の方とお話をするような段階でもないし、余裕もないんですという話をしたと思います。そのときに徳山さんが私に言ってくださったのは、いや私を国土交通省の人間だと思わないでくれ、国の人間として皆さんが求めることを聞くために電話しているのだと。何でもいから、何か困っていることがあるでしょ、何でもいから言ってくれと言われたので、先ほどのような状況でしたから、私は徳山さんに正直に、棺桶を手配してほしいとお願いしました。

もちろん国土交通省の東北地方整備局は普段からお付き合いのあるところで、言っただけでは駄目だとは思わなかった一方、そこまで期待をして言ったわけではなかったのです。でも、それく

らい困っている、そういう状況なんですということを伝えました。そうしたら徳山さんは、分かりましたと言ってくださって、私は元々情に生きていような人間ですから、すごく助かったのです。やっぱりこちらが言ったことを国がそうやってちゃんと受け止めてくれているという事は、本当にもう八方塞がりの状況で、どうしていいか自分自身も分からなくなっていてもう逃げ出したいくらい感じでしたから、本当にありがたかったです。

被災地全体に対しても、徳山さんから自分を闇屋の親父だと思って何でも言ってくれという手紙を出していただいて、これは行政が出す通達とかとは全然違って、仲間なんですよ、頼ってくれよというお手紙だったので、本当に救われたという思いでした。悲しいことばかりがあった中で、前を向かせていただいたエピソードです。

## 6 「くしの歯作戦」による道路啓開

次に道路啓開の話です。皆さんもご存知の通り、道路が全部塞がったときに、本来のルールでは国道は国が、県道は県が、市道は市でやってくださいとなっています。土砂崩れみたいなものであれば部分的な話なので、それでいいと思いますが、全部の道路が塞がれたとなれば、どこが何道などという話にはならないわけです。地域の建設会社さんたちが本当に積極的に動いていただいて、いち早く道路を啓開していただいた。これは今後起こるかもしれない全国での事象に対して、非常に有効なことだと私自身も考えています。

後に「くしの歯作戦」と呼ばれる、内陸の幹線道路から三陸沿岸に向かって、櫛の歯のように道路を開いていくことをやっていたわけですが、あの当時は、国交省のみならず様々な省庁の地方にある出先機関を無くしていきましようというような考え方があって、そうすると東北地方整備局も無くなっていたかもしれません。

我々のように地方に住む人間からすれば、命綱というふうに前から思っていました。この震災を経験して、ずっと東京で仕事をされている方が、陸前高田市の市道がどこを走っているのか、県道がどこを走っているのか、地図上では分かるのかもしれませんが、実際は起伏の問題や幅員の問題なども把握をされていない人が何かあったときに活動できるのかといえませんが、実際は起伏の問題や幅員の問題なども把握をされていない人が何かあったときに活動できるのかといえませんが、

地域を知っている人たちがお世話をしてくださることがすごく大事だということが、この東日本大震災で証明をされたと思っています。是非とも地域と連携した出先機関であってほしいと思っています。

こうして、様々な立場の人が道を繋いで、食料の確保、外から人が入れるようにしていただけたことに、心から感謝を申し上げたいと思います。



## 道路の啓開

図9 道路の啓開



図10 道路の啓開

田市の場合はたくさんの職員も犠牲になっていましたので、そういう中で皆さんの要望に対してどこまで答えられるかということ本当に大変でした。



## 被災者の感情

食料調達・一本松の保存・震災遺構の保存

図11 被災者の感情

## 7 被災者の感情と向き合う

我々も被災者の皆さんへの対応をしていく中で、被災者の皆さんの感情と向き合うのは本当に厳しいものがありました。

一つには食料です。当然、何も無いところからスタートするのですが、次第に全国の皆さんの声援をいただいて、簡単なものから入ってきます。一番初めはカップラーメンとインスタントラーメンが届きます。ところが、水がない、お湯が沸かせないのに、インスタントラーメンがどんどん届く。これは日本人のステレオタイプで、災害が起きたらまずカップラーメンやインスタントラーメンだということになっていますが、結局は乾麺をそのままバリバリ食べるしかなかったというのが被災地の実情でした。

おにぎりや食パンが届くようになると、皆さん本当に涙を流して美味しいありがとうございますとなります。カチカチのおにぎりであっても、これ1人で1個食べていいんですか、全部食べていいんですか。そんなことをおっしゃいましたけれど、1週間や2週間が経って、だんだん慣れてくると、いつまでも食パンやおにぎりばかり食べさせるな、たまには温かいものを食べさせろ、フルーツが食べたいという言葉が出てきます。それが悪いというのではなく当たり前のことです。しかし、陸前高

プッシュ型で送られてくるものが多く、ありがたいのですが、皆さんのリクエスト、例えばケチャップが欲しいと言われると、どこにケチャップを頼めば良いのかという話になります。

我々はインターネットなどで、いま陸前高田市では被災者の方がケチャップを欲しいと言っていますと流しました。すると、ケチャップしか来なくなるんです。しかも、もう足りていますと流してもそれを見てくださいらないと、どんどんケチャップが来るんです。このような問題は沢山あって、魚なんかも大量に送ってくださる方がいました。生の魚を日本海側から2トントラックに山ほど積んで来て、食べてくださいと言ってくださった方がいたのですが、調理ができないので食当たりなんかが出たらどうしようもないです。そういう経験値が私達も含めて無かったということ、それから情報の回し方がまだ当時はなかったということ、かえって被災者の皆さんの感情を逆なでしたりするのです。目の前に美味しそうな魚があるので、私にくださいという人はいっぱいいます。でもあげられないです。それをすると、「あいつら自分たちだけで食べるんだ。市役所の連中だけで美味しいものを食べている。」という話になってしまうわけです。

被災者の皆さんとの感情のすり合わせは非常に難しかったです。私もいくつか決断を迫られる場面がありました。一つは奇跡の一本松を残すか残さないかということでした。

最初は生きている状態で一本松が残ったので、奇跡だよ、希望だよということで、みんなが注目をしました。ところが樹木医さんから、既に枯死しており放置すると中がスカスカになって倒れるかもしれないので危ないと言われました。違う形でも残すのか、あるいは切ってしまうのか。私は陸前高田という町をそもそも誰が知っているのかということを考えました。東日本大震災が起こる前に陸前高田を知っていましたかと聞けば、東北に来られた方は知っているかもしれませんが、東京に住んでおられる方、九州に住んでおられる方など、陸前高田ってど

こにあるのかとなるでしょう。その中で、たまたま震災で大きな被害を受けたから陸前高田の名前が出るようになった。でも被災地なんていうのは福島、宮城、岩手、その他にもいっぱいあります。陸前高田なんか2年か3年もすれば忘れられてしまうだろうと。

復興には物凄い時間がかかります。でも、みんなに忘れられて、商売もしづらい状況で人口はどんどん減少して高齢化がどんどん進んで、そんな将来に希望が持てないところに対して、みんなが頑張れるだろうかということを考えたときに、陸前高田という名前を忘れられても、奇跡の一本松があるところですねと言ってもらえれば、少しでもみんなの励みになるよねということで私は一本松を残す決断をしました。

最初は市民の皆様も残せと言っていたのですが、税金を入れる、1億5000万かかるとなると、週刊誌に陸前高田の人は頭がおかしいと書かれました。被災者は体育館に住んでいるのに、サイボーグ松に1億5000万の税金を投入して残そうとしているという話をされて、市民も次第にそういう雰囲気となり、全市民に1万円ずつでも配ってくれという話になるわけです。

結果として陸前高田市に追悼祈念施設を作っていただいたのも、一本松という象徴的なものがあったからだと思います。東日本大震災の傳承を、国や世の中が認めてくださったから、あのような形で施設ができていると私は思うので、このような決断を迫られたときには、やっぱりしっかりと決断をしなければいけない。私は、判断と決断は違うものだと思っています。判断とは、何か好材料を示されたときに皆が同じ方向を向けるものだと思います。いろんなところで話をするときには言うのは、例えばAのケーキとBのケーキがあって、10人のうち8人の人がAの方が美味しいと言いましたというデータをもらったら、自分自身が食べていなくてもAの方が美味しいと思われるんでしょ。これは判断です。

でも決断というのは、世の中が何と言おうと、周りが何と言おうと、自分のインスピレーションや本心に大きく左右されると思っているんですが、私はやっぱり5年後、10年後、自分の下した決断がどうなるかということを意識しています。一本松についても、1億5000万円以上の経済効果なりを出せば残した方が良かったとなるだろうと考えました。

もう一つ、震災遺構をどうするかという話がありました。震災遺構というのは被災してしまった建物のことです。国からは一定期間、この期間までに壊すか壊さないか、みんなで相談して決めてください、壊すと決めたのであれば解体費は国で持ちますと。大変ありがたい話です。ただ、もっと相談しなければいけないということになったとき、最終的に1年後2年後にやっぱり壊しますと言われても、それはあなた方のお金で壊してくださいという話でした。私達もどうしようかという話になったのですが、当時は手を合わせていただく場所は陸前高田市役所だったのです。たくさんの方が犠牲になった象徴的な場所でした。大学の先生方などは絶対残せと、一切片付けるなというふうなお話もたくさんいただきました。広島原爆ドームでは

ないですけども、それを残すことによって傳承活動が分かりやすくなるのは事実です。

陸前高田市では多くの職員が亡くなりました。市全体で、臨時職員も含めて約400名の方がいるんですけども、そのうち111名が犠牲になっています。



図12 あまりにも大きかった市職員の犠牲

4人に1人以上の職員が犠牲になったということで、ご遺族の皆さんに、親しい方に何人かに、どのように考えますかということをお聞きしました。

そうすると意見がやっぱり分かります。自分の娘は、あそこで死んだ、あそこが最後の居場所だった、市民のために自分の命をかけて最後まで頑張った、そういう最後の居場所をあなたは壊すというんですかと怒りながら喋る方がいる。それを聞けば、そうですよねということになります。でも一方で、うちの息子は逃げたかった、でも公務員だから逃げなかった、苦しい苦しい思いをしてこの世に未練を残して死んだ、その建物の横を通るたびに自分は息子を想像して泣きながら生きていかなきゃいけないのですか、自分の命ある限り泣いて暮らすのですか、そんな酷いことを考えているのですかという人もいます。これも、そうだよなということになります。両極端の意見ですが両方に納得のいく、そうだよなという話です。それでは、どうするかを考えたとき、私はやっぱり5年後、10年後を想像しました。壊さないで欲しいと言っている人は、もしそれを壊してしまったときに烈火のごとく怒るだろうなと思います。でも5年後10年後に同じレベルで怒っているかと言えば、多分そうではなく、日々その怒りは諦めも含めて少しずつ減っていくだろうと思いました。一方で、悲しい思いをしている、それを思い出さずという人の気持ちは多分、5年経っても10年経ってもそうそう変わるものではないだろうと考えて、これはもう誰にも相談することなく、陸前高田市内で犠牲者が出た建物については全て壊すことにしました。いま残している建物は犠牲者が出なかった建物です。私がここで言いたいのは、公務員は逃げる選択肢を持たされていないところに大きな問題があると思っています。私が判断しかねたのも大きな問題なのですが、役所の職員で逃げましょよという人は誰もいなかったです。もちろんそんなに大きな津波が来るという前提ではなかつ



たのが大きいのですが、私はやはり、111名の皆さんが犠牲になってしまったというこの重たい事実、こうした経験も踏まえて、色々な自治体関係者の方々に、職員の身に危険が迫る場面については逃げさせて欲しい旨を、平时に市民の皆さんにお伝えをしてほしいということをお願いしています。

もちろん市長さんや町長さんが言うと、色々ともた言われてしまうこともあるでしょうから、東日本大震災で大勢の職員が亡くなった陸前高田市の人が言っていた事として構わないというお話をさせていただいています。

でも、首長さんの中には、自分事になっていない人たちは特にそうなのですが、戸羽さんは何を言っているんだ、多少の犠牲は仕方ないと言う人もいます。多少の犠牲は仕方ないと言っても、全ての職員に家族がいて大事な人がいるわけですから、職員である以前に人であるということを皆さん、市民の皆さんとともに自覚をしていかなければいけないと思っています。

## 8 創造的復興を目指して

法律が復旧・復興の邪魔をした場面も沢山あります。例えば、ガソリンはガソリンスタンドが無ければ持ってきてくれない、ではどうするのかという話をしても答えがないのが当時の状況でした。ドラム缶でも何でもいいから持ってきて下さいとお願いをすると、君だって法律は分かっているだろう、ドラム缶で持ってくるなどもってのほかだ、そんな危険なことできるわけないだろうと言われてしまいました。しかし代案が無い状況で駄目だと言われたら、本当に絶望するしかないわけで、ガソリンが無かったというのは本当に大変なことでした。

また、国交省関係で言えば復興の区画整理事業が、通常の区画整理で行われたことも本当に大変なことでした。私はずっと復興庁の皆さんにも提言してきましたが、災害を受けた後に区画整理をする場合に、即効性のある区画整理制度がないと非常に大変なことになると考えています。通常の区画整理事業は、10年から20年の歳月をかけて実施するものですが、復興にはそこまで時間をかけていられないという現実がございます。もう少しスピード感のある体制が必要だと考えています。



図13 創造的復興を目指して

創造的復興ということで、我々もまさにビルドバックベター、今までの課題も少しずつ解消しながら、震災前より良い街を新しく作らなければいけないということで、様々なことをやらせていただきました。その一つの象徴がこのベルトコンベアであったと思います。

震災で全ての橋を流されまして、震災後すぐに仮橋を1本かけていただきましたが、この仮橋のみが活着している感じで、気仙沼方面に行くにせよここを通らなければいけないということでした。ここをダンプで土を運んでいったのでは嵩上げに9年かかるという話をされて、とてもそれは無理だということで、このように大それたこともやらせていただきました。

大きな岩を砕いて、ベルトコンベアに乗せて運ぶのですが、ベルトはゴムでできているので裂けてしまうので、橋のところに電気をつけて修理をしてもらいました。すると、この電気がライトアップだと捉えられて、市民や全国からお前のところは観光地かということでバンバン苦情が来ました。日中はフル稼働していますから夜間に補修をしてもらうためにライトをつけているだけなんですけど、世の中は大体そういうものだと感じました。



図14 国・県と被災自治体の連携・役割

国や県、被災自治体との連携役割ということで、この写真は陸前高田市議会です。2011年3月に議会の最終議決をする前に被災をしてしまったので、新年度予算の最終議決をしなければなりません。これは高田小学校の大教室を借りて本会議を行っているところです。大きな仕事は国をお願いをしなければとても前に進みません。そして、我々是对市民、对被災者が主な仕事でした。

特にこの廃棄物の処理、これについては様々ございました。皆さんご存知の通り、当時の石原都知事がいらっしゃって、廃棄物を引き受けてくださるということで一気に進むようにはありませんでしたが、それまでは本当にばい菌扱いをされて、同じ日本人なのかというような思いをした人もたくさんいると聞いています。パフォーマンスにも使われてしまったり、選挙の話とかいろいろ聞こえてきましたので、そういうことにも使われてしまったなという思いです。

## 9 震災伝承の重要性と課題

次に伝承のお話をさせていただきます。本当にわがままを言いながら復興祈念公園そして国の追悼祈念施設を作っていました。また道の駅に毎月10万人の人が押し寄せたのです。単純計算して冬が多少減ったとしても、年間100万人ぐらいの人が陸前高田に来るということになりました。

もちろん今でもたくさん来てくださっています。もちろん10万人とはいきませんが、昨年度に陸前高田市を訪れてくださった市全体の観光客は110万人を超えたというふうに言われているので、田舎の町にしてはかなりの人が来てくださっています。

また、気仙沼に三陸沿岸道の大きな橋が架かったので、1回通ってみようという人が多いです。道路の効果、それから道の駅の効果、それから一本松を含めたこの追悼祈念施設、そしてあの伝承館が、陸前高田市に人を呼び込んでいます。

そもそも、伝承館を作るとか、道の駅を作るとか、国と県と市で一つのものを作るのは非常に難しいのです。お金の出し方の話もある、どこからどこまで誰が責任を持つかという管理の話もある。震災を伝承していかなければいけないという、みんなの意思が一致できたからできた施設だと思っています。

創造的復興を目指して



震災の伝承の重要性と課題

図 15 震災の伝承の重要性と課題

陸前高田市に観光バスが来ることは過去に無かったのですが、今はこの写真にも出ていますが、常に大型バス3台4台は必ず止まっています。その人たちがお金をどれだけ落としていくのかどうかは別にして、そうやってバスが止まると観光客の人も必ず立ち寄り、立ち寄れば必ず何かを買って行きます。ジュース1本でも買っていきます。

これは本当に大きいと思います。防災学習などでもたくさんの方が来てくれています。徳山さんもおっしゃっているんですが、私達が今の施設をなぜ作ったか、その伝承施設をなぜ作ったかということ、防災・減災を自分事として捉えてほしいというのが私達の狙いです。



東日本大震災津波伝承館

図 16 東日本大震災津波伝承館

でも、最後に皆さんが残して下さるメッセージに何が書いてあるかという頑張り東北です。あるいは東北の人たちがかわいそうと、同情であったり応援であったりというメッセージをたくさん今でもいただきます。大変ありがたい。でも私達が思っているのは、ここで勉強しました、私も今日からこうします、明日からこうします、帰って家族にこういう大切さを伝えます、家族と相談します、という動きになって欲しいわけです。災害がどこかで起きれば、災害を自分事として捉えることの大切さに国民が気付く瞬間が来るわけですが、そのようなタイミングをただ待っているわけにはいきません。1人でも2人でも多くの方に、防災・減災を大切なことだと思ってもらえるように活動していかなければいけないと考えています。今でも津波伝承館には大勢の方に来ていただいて、日々学んでいただいていますし、海外の方も少しずつですが来てくださっています。そのような意味でも、新しい陸前高田市に生まれ変わりつつあると思っています。

## 10 減災とは、後悔を減らすこと

最後に一つだけお話をさせていただきます。私はこの防災減災等々の話をするとき、あるいは東日本大震災の話をするとき必ずこの復興がよかったのか悪かったのかという話を基軸にされてしまいがちだと思っています。

良い復興とは何なのかというと、大体メディアからすると、お金がかかってなくて時間がかかってない、これが一番良い復興だという話になります。私は復興というのは、次の災害が起こったときに証明されるものだとしか言いようがないと思っています。私は良い復興とか悪い復興とか、そんなことを議論するのではなく、どうやって国民市民の命を守るんだということをもっと議論することが大事で、そのために国土強靱化もやっているわけですし、事前の防災活動もやってるわけです。私はそこをメインにしたシンポジウムなりはもっと増えていかなければいけないと考えています。

防災・減災という言葉を使っていますが、私は防災という言葉

葉はあまり好きではありません。好きでないというのは、「防災でできますか。」ということなのです。天気予報で明日、台風が来ると言っている、東京を直撃するかもしれないと言っている。防災はできないけど減災はできるということを、自分事として捉えてもらうためには、この減災という言葉をもっと広げていくべきだと思います。私に言わせれば、減災というのは何を減らすのかと言えば後悔なんです。みんなの後悔を減らすことが減災だと思っています。

例えば、体育館に避難をした人たちは、着の身着のまま、冬ですけどコートを着る暇もなかったなど様々あります。お腹が減ったけれど何も持ってこなかった、喉が渇いたけど水1本持ってこなかった。そういうことを想像したときに、体育館に逃げました、命は助かってよかったね、でも喉が乾いたね、水を持ってくればよかったね、これも後悔ですよ。小さな後悔です。腹が減ったら、パンも持ってくれば良かった、コートを着てくればよかったなど、全部が後悔なんです。

災害が起こったときに自分がどう行動するのか、想像力を働かせて、後悔を減らすためには、いま何をやっておくべきなのかを考えることが減災だと思います。

これは行政がやる話ではないです。これは個人個人、また家族単位でやるべきことです。この究極の減災、要するに後悔を減らす減災をやってほしい。その中でも、何かがあったときに家族とどうやって連絡を取って、どうやってどこで落ち合うんだということを決めておくことが一番大事だと考えます。

東日本大震災ではみんな津波から走って逃げました。走って逃げて高台まで逃げた人は沢山います。良かった、助かったとそのときは思います。でも周りを見たときに、娘がいなくて、息子がいない、おばあちゃんがいなくてなるわけです。助かって安堵した気持ちが急に無くなって不安に襲われる。そして津波が海に戻っていく。さっきまで水に埋まっていた場所が見えてくると、せっかく高台まで逃げた人がみんな下って行ってしまったわけです。そして第2波、第3波でやられたのです。

もし首都直下型地震が来たら、街の中で兄弟や夫婦や、家族の皆さんとも連絡が取れなくなります。お互い探し合ったとしても、この大都会の中で、これだけの人がいる中で、どうやって会うのですか。もう会えるか会えないかわからない。だからこそ、こういう災害が起こったときに、何日後に会えるかわからないけれど、あの場所で必ず待っているよと、俺が先に行って待っているかもしれないし、お前が先に着いたらそこでじっとしているよと、そういうことを話しておいてほしいです。

私も家族を助けに行きたい、でも市長だから現場を離れるわけにはいかない、そのジレンマの中でずっと市役所の中で仕事をしていました。これはまさに、皆さんにお話したことが欠けていたのです。俺が市役所にいるときに何かあったら、俺は市長だから出られない、お前の所に戻って来られないから、お前はこうしているということを言っておかなかった。だから私はとても後悔しているわけです。私の妻は亡くなりましたが、皆さんにはそういう後悔をして欲しくないのです。

これは1人1人がやることです。家族単位でやることです。

これを怠ったら後悔するのはあなた自身ですということを日本中の皆さんに理解をいただければ、私は何があっても命を守ることができるのではないかと、そんなふうに思っています。

ありがとうございました。

## 11 質疑応答

### 【質問者】

リーダーとしてどのような心構えで臨まれたのかお伺いします。被災した市民の皆様は気持ちのやり場がない中で、怒りを行政にぶつけるというのは、市民の立場に立てばそうなんだろうと思います。そのような中で職員の皆様をどのように引っ張っていかれたのか、どのような気持ちで取り組まれたのか教えてください。

### 【戸羽氏】

私も家族を亡くしています。もし、私が家も流されていない、家族も元気でしたとなると、職員や市民からの風当たりはもっと強かっただろうと思います。結局、この人だっ大変なのだということを市民の皆さんも、職員の皆さんも分かっているわけです。生き残った職員のほとんどが家族を亡くしているんです。一番ひどい人は、2人しかいないお子さんを2人も流されてしまったんです。私が30歳で市議会議員にさせてもらったとき、彼が事務局で一番若手でいたんです。2回も流産しているんですよという話をされて、3回目には絶対生まれるように早め入院させると、そして生まれた子供は私の次男坊と同級生で、一緒にバスケットをやっていた子なのですが、当時10歳で流されて、下の女の子は5歳ぐらいで流されたんです。それでも仕事をしている。これは公務員の性なのか分からないけれど、皆さん家は無いので給食センターに住んでいるわけです。我々みんな、住むところも寝るところもないし、寝る時間もないからですけど、夜には大人がみんな泣いていました。

でも市民の前に立てば、私も皆と一緒にというか、仲間意識というかですね。リーダーとして部下に指示をするような構図ではなく、どちらかと言えばこの分野はお前に任せるから頼むという感じですね。何かあったら言ってとか、何か問題が起きた





ら全部俺のせいにして良いとかいう形で、ずっとやってきました。特にリーダーだからどうのこうのという心構えは無いです。

我々のエネルギーの源は悔しさです。後から悔しい思いをするから後悔なのです。だからこそ、もっと良い街にしてやろうとか、周りの街に負けていられないとか、そのようなエネルギーに変わったのだと思います。

#### 【質問者】

瓦礫の山の中から復興したというのは、これから災害を受ける地域にも、あの東北がここから復興したのだということを力強くイメージを持ってもらうという意味で、さらに復興・発展をしてほしいと思います。市長になられて12年間、どこが一番つらかったのか、一番心が折れそうだと感じられたことと、どのように乗り越えられたのかというところ。漠然としたご質問ですけども、ぜひ聞かせていただければと思います。

#### 【戸羽氏】

全体で言えば、やはり一番初めのところ、要は人としてどうだよという自己嫌悪。妻が行方不明になり、6年生と4年生の息子のところにも居てあげられなくて、行方不明の人を他の市民はみんな探して歩いているのに、私は探しに行ってもできない。市長としては普通かもしれないですけど、家族の一員として、夫として、父親としては、これは駄目だということとは自分でわかるわけです。しかも、やらなければいけないことがいっぱいある。でも、やらなければいけないことを、時間があれば全部自分でできるかと言えば、それはできません。やっぱり不得手は、誰にもあり、この分野は苦手だという分野はあります。

最初の頃、妻は遺体でしか見つからないだろうなと思いましたけど、もう見つかったら、逃げようかなというぐらい追い詰められました。

色々な人々と話をする中で、戸羽さんは何でもかんでも自分でやろうとするから駄目なのだと、もっと人を頼ったらいいと言われました。あなたがやらなければいけないとか、やりたいと思っていることを第三者にやってもらったって、市民からしたら結果は同じだからどんどん人を頼ったらいい。あなたの仕事は、いろんな人と付き合って、いろんな人と友達になった

方が早いと言われたのです。人を頼ってもいいということを考えるようになってから非常に楽になりました。

でも、やはりメディアとかの人たちは、きちんと取材していないけれど年に1回、3月11日になると必ず特集を組んで、そのときに陸前高田がターゲットにされるわけです。なぜこういう町になっているのか、なぜこういう嵩上げをしているのかという話は全然無く、金が掛かっているとかそのような話しかされないわけです。

でも我々が例えば嵩上げをしたときに、防潮堤を水が越えても街に水が入ってこないような計算をされていて、実際に日本海溝地震が起こっても、陸前高田防潮堤が壊れない限り街は浸水しないことになっているわけです。あの東日本がもう1回起こっても大丈夫なようになっているのに、そういうことをメディアも市民も理解してくれません。担当の職員は必死にやっているわけで、なんでそう簡単に人の努力を否定するのかと、そういうときは心が折れます。

人はそういうものです。自分の利益のために何かやっているんだったら文句を言われてもいいと思うのですが、そうではなくてみんなのために考えて考えて寝る間も惜しんで仕事をしている人に対してでも否定をされてしまうみたいなきには辛いんです。私は政治家だから、批判されても逆に文句も言い返せる立場なので良いのですが、やっぱり部下の人たちがそういう思いをしているときは辛かったです。

しかし、他の被災地への励みにもなる言葉は大変ありがたいと思います。そして、この復興は、本当に多くのお金を出してもらって、やらせてもらっているのです。国の財政状況を鑑みるにつけ、南海トラフ地震が本当に起こって最悪の場合で、宮崎から静岡あたりまで被害が出たときには、ほぼ100%国でお金を出すから復興しなさいという話には多分ならないだろうなと思います。だから、インドネシアやフィリピンの人に来てくれて、どうやったらこんなに早く復興できるんですかと聞かれたときに、説明しづらいんです。財布はどこからですかと聞かれて、国からですと答えても、それはいいですね、で終わりです。自分たちだけでお金を出そうとしたら、とてもじゃないけど、あんな復興できるわけがないです。そういうことも含めて、国土強靱化のように前倒しでやっていくことが求められていると思います。



**【質問者】**

復興の場面での質問ですが、当然、復旧復興を早くやらなければいけないというのが大原則でありつつ、例えば国の制度で、5年間で何かをやらなければいけないとか、期限が決まっていたりする状況で、もう少し時間をかけて合意形成や議論をしたい場面もあったと思うのですが、その復興を行う上での制度期限があることの善し悪しについて何か実際の体験でこういうことがあったということがございましたら教えてください。

**【戸羽氏】**

期限を切られてというのはあまりないです。ただ一つには、復興計画はそれぞれの自治体でつくのですが、その計画期間を何年にするかということから始まるわけです。

私達の町は、先ほども言ったように壊滅状態から始まりました。瓦礫の処理もどうすれば良いかわからない中で、復興に10年はかかるというのが皆の意見でした。

65歳以上の人が人口の40%、80歳90歳で元気な方がいっぱいいるわけです。そのような人たちに、あと10年経ったら復興するからなんて、そんな夢のない話ではできないですし、みんなのモチベーションをどうキープするかが我々の課題だったのです。みんなが前を向けるように嘘つきになってしまうかもしれないけど前を向けるようにやろうということで、8年という形にさせていただきました。

国の制度で、この期間を区切られているから駄目だということはありませんでした。

ただ、復興交付金と言って、メニューを示されて、これに使っていいです、これに使っていいですと各省庁の中でメニューを示されたわけですが、それを作る段階で、我々に相談はありませんでした。我々の復興計画の中でこれやろうねと言ったらメニューに載っていないという話になりました。これができずっていうメニューではなくて、これには使えないというメニューにしてもらわないと、みんなアイデアの出しようがありません。

こういうことをこれぐらいの予算あればこういうことができるということを、被災地から声を上げられるような制度にして欲しかったと思います。



**【質問者】**

私も前職において、災害の対応を何度かやりましたが、そのたびごとにマスコミとどう上手く付き合っていくかが課題でした。マスコミが被害者の側に立ったサポートをすると、矛先は行政になることが多くて、行政も頑張っている、あるいはこれぐらいの大きな災害になると行政もできないということを新聞社やテレビ局の偉い人と喋ると、そうですよねと言ってはくれるのですが、記者はそのように書いてくれません。

行政も頑張っていること、現場の本当の苦勞をこれまでも発信されていると思いますが、マスコミのそれに対する対応や手応えはいかがなものでしょうか。

**【戸羽氏】**

マスコミの皆さんは記者それぞれ考え方があって、行政の方も大変ですねとってくださる方もいっぱいありますが、いざ記事やテレビのニュースに流れるとなると、結局それをチェックする人がいて論調が変わることは往々にしてある話です。自然災害については被害を受けた方が当たる矛先がないことが一つ、それからもう一つはメディアも週刊誌化しており、こう言った方が面白くて視聴率が取れるということ。事実じゃないことをテレビで流されるなんてざらにありますよね。だから後から一応言いますが、違いますよと言っても、ああそうですかすみませんで、終わりです。

だからこそマスコミと仲良くしなきゃいけないというのがあります。普段から喧嘩とか敵対視してしまうと、何かのときに狙い撃ちされたりする可能性はあるので、言論の自由などと言っていますが、常識からかけ離れた方もいらっしゃると思います。

でも仕方ないのでしょう。とにかく何か世の中で受ける話題になることさえ取ればいいというのがあるのだと思います。報道特集でも本当にそうです。

**【質問者】**

答えのある質問ではないのですが、どのように人を自分事化させたら良いかが今の我々の課題です。語り部の方々の話を聞いたりすると、12年経つと不思議だなと思うのは、みんな結

局同じことを言うようになる。要するに色々な恨み節を言っていたはずが、結局12年経って全て不純物を消化してしまったら、例えば大川小学校の遺族の方も、結局、事前にどう備えておくのかなのだと、あの場の先生を責めても、市役所を責めても仕方無いのだと、自分も遺族であるけれどもちゃんと考えていなかったのだと、それを伝えたいと言います。結局、戸羽さんの話も私の話も、一度ひどい目に遭った人は全部分かるけれど、遭わなかった人にはどうやって伝えるのかと、今、我々は伝える内容と、伝える場についても、訓練に來いと言っても駄目なので、教育やお祭り、家を契約するときに絶対聞かせる仕組みとか、損害保険に入るときに必ず説明する義務とか、要するに情報をどう自然に否応なく聞かせるかということシステムチックにしようとしています。そういう組織や場を作ろうとはしているのですが、そこに入れるべき魂は何かと考えます。ぜひ戸羽さんのお考えをお聞かせください。

#### 【戸羽氏】

システムチックにやっていくことは大事だと思います。ただ、魂という話になると逆に非常に難しいと思います。人というものは世の中に色々な情報がある中で、自分にとって得なものだけは入ってくるのですが、自分にとって都合が悪いものや関係ないものは全然耳に入ってこないし心に残らないものです。最後に申し上げたように、行政は何もしてくれないことを行政が言うのが当たり前になる方が良いと思います。首都直下型地震が起こった最初の20秒間、何をするかだけでも考えておいた方がいいと思います。消防署員が何かやってくれる、レスキューの人が助けてくれる、自衛隊が助けてくれるといった他力本願が強いから自分事になりづらいのだと思います。

外国だったら平気で言うのかもしれないですが、日本人は選挙を意識しすぎてなかなか言わないです。しかし、そうならないか自分事にしようと思わないですね。だからそこにシステムチックなものがあって、聞かなければいけない説明や、保険に入るとき地震保険はこうなのだとか、嫌でも家族で会話になりますし、社会でも会話になります。

被災した人間からすれば、首都直下型地震が起こると言われているのに、誰も気にしていないことに驚きます。根性があるのか勇気があるのか分かりませんが、これは大変なことだなと思います。

---

本内容は、2023年9月26日に開催した第34回国土政策研究所講演会においてご講演いただいたものです。